

まえがき

熊本の地震では、異常なほど余震が継続しているのに、地震学者からは納得のいく解説がなされていません。「ひずみ」が開放されるのが地震ならば、一旦「ひずみ」が解放されたのなら、地震の要因はなくなるのじゃないのか、と思うのが普通ですが、その疑問に答える合理的な解説はありません。

また地震のたびに「未知の断層」が発見されると報じられます。地震学者は「まったく新しく断層が出来ることもあります」と答えています。それならば「活断層の上」は危険だから原発を作ってはいけない」という法律は意味がなくなるのじゃないか、「どこでも危険です」といっているようなもので、活断層調査とはいったいどんな意味があるんだ、と思うのも当然のことです。しかし、地震学者からも、原子力規制委員会の専門家委員たちからも、説得的な回答は寄せられません。

今、ネット上で「地震学は根本的にどこかが間違っているのじゃないか」という声が上がってきています。

本書の基礎にある「地震爆発論」は1988年の秋に考えついたものです。それ以来28年間、書籍を作り、講演会を行い、街頭での活動を行ってきましたが、「地震爆発論」に賛同する人は数えるほどしかいませんでした。それでもネット上に見られる声の中には「地震爆発論」を支持してくださる声が多くなっているのです。

「地震学の間違いが国を滅ぼす」というのは、決して大げさな話ではなくなりました。地震学の間違いを学び、「活断層理論」や「プレートテクトニクス理論」から脱出して「地震爆発論」に切り替えなければ、この国は手遅れになるというのが実感です。

どうか、地震学は日本で誕生した「マグマ貫入爆発論」のほうが正しいことを学び取ってください。本書で述べる「地震爆発論」はその理論を補修・強化したものです。

この国を滅ぼさないように、本書をよく読んでいただきたいと願っています。